

欧州式・小規模

バイオマス発電道内展開へ

札幌 仏企業と釧路、標津の2社連携

【札幌】牛の糞尿を処理・利用する欧州の小規模酪農家向けバイオマス発電事業を道内でも活用し広めようと、フランスのナスケオバイロンメン

ト社と釧路のサンエス電気通信（宮田昌利社長）、標津の上田組（上田修平社長）による、連携調印式が6日札幌で開かれた。日本での販売代理店として本社を札幌市東区

に置き、道内をはじめ、全国での事業展開を目指すことにしている。牧場の牛の糞尿を利用するバイオマス発電は、道内でも展開しているが、大型の場合建設費が高額で売電価格の変更や運営コストの上昇などさまざまな問題も生じている。

上導入実績のある、ベルギーのバイオエレクトリック社の「個別型乳牛ふん尿バイオガスパラント」。乳牛100頭規模からの導入が可能で、自家消費か売電の選択が可能で、契約から設置まで最短12カ月で建設が可能。「工事自体は5日程度」と説明している。すでに別海や標津町内で導入されている。

ナスケオ社の製品は、欧州を中心に400件以

日本販売代理店となるナスケオ環境の社長に宮田社長が就任、宮田社長



連携調印式後握手を交わす右から上田社長、宮田社長、クリステールCEO

によると、「1件あたり2億2〜3000万円程度。道内の企業にも広く協力を呼び掛け、5年ぐらいで100件程度に」と意気込んでいる。

仏本社から調印のため訪れたクリステール・ルージュビエフCEOも「サンエスや上田組の知見を生かし日本で大きな振興ができると願っている」と語り、上田社長も事業の展開に期待を込めた。（武田博）